

東京太郎

東京太郎

世田谷区北沢

意外と知られていないが、世田谷区北沢。そこにはコンクリートジャングル東京唯一のオアシスがあった。昼は陽光を、夜は月光を乱反射させて輝く、伝説の泉があった。そして人々はその泉をこう呼んだ。

神々の涙、「ニュフルンベルク」。

これは「ニュフルンベルク」にまつわる伝説と、運命に翻弄されるピュアな青年「ケツアラー」の愛と勇気を描いた、奇跡の物語である。

冷蔵庫には大量の酒、冷凍庫には某スーパーマーケットにて半値で売り捌かれている冷凍食品を万全にストックし、服はパジャマ以外着用禁止。そう私は「本格的に部屋から出ない生活をしよう」と、反社会的体制、つまり引きこもりという身分に成り下がることを望みながらも妙に快活に、凛々しく、寧ろ誇らしげに決心を固めていたのであった。しかし人が生活する上で減りゆく定めのある物品は酒・食料品の他にも多々あり、例えばそのストックして置いた菓子「じゃがりこ」を食った後、その「じゃがりこ」の内にも少なからず不要な物質は含まれている訳であるから、神々は御丁寧に人も人がそれら不要物を肛門から排泄できるようプログラムして産んで下すった、で。必然的にそこで必要となるのは、トイレット・ペーパーである。が、切れたのである。あまりにも突然に。

となればいざ、久方ぶりの外出。最早ドラキュラ体質の私には痛い陽射。薬局よりも百円ショップで購入する方がワン・ロール当たりの単価が数十円安く上がることを私の海馬は記憶していたので、よしそうしようと下北沢まで歩いて向かうことにした。ゲルニカの落書きで埋め尽くされた寝巻き姿で、テクテクと。

無事辿り着き、目的の品はトイレット・ペーパー。ならばちゃっちゃと買って帰って糞でもしようか我が肛門よ、としかしその時。想定外の範囲外の事件である。

店員が、ジェノサイドクラスの美女なのである。

そしてこのまま素直にトイレット・ペーパーのみをレジへと持って行った場合、以下のような危険に曝される恐れが想定される。

一。私の肛門の形状・位置・皺の本数及び、ケツを拭く仕草を店員に勝手に想像されてしまう。ええやないかい、尻を拭うんは全人類共通の行いや、と第三者の貴様はいうかも知れない、が、甘い。浅い。侮るなかれ。例えば私は手を後ろに回し肛門を拭くという手法、所謂『後方クレーンショベル式（別称：鶴のお辞儀）』を好んでいて、これまでの人生で数え切れんばかりの回数、この『後方クレーンショベル式（別称：鶴のお辞儀）』を行ってきた訳であるが、店員ときたら、ジェノサイド。その可愛らしいチワワのような笑顔を武器に周囲の男性を大量虐殺しつつ育ったに違なく、きっと生意気に股座の合間に手を潜らせてケツを拭く方法『前方ブランコ式（邪道）』を想像するのであろう。そしてその場合、店員は「あっ、股座から右手を潜らせる際にぶる下がった陰茎並びに陰毛の先端近辺に付着している残尿が腕についた、不潔」というシーンにまで話を飛躍させ、更に「こいつはその後、手も洗わずに出てくる種族の輩だわ、きっと」そこまで当てられたら、否、そこまで勝手に想像されたら必然的にレシート・釣銭を渡す時に軽く手が触れないよう心がける、だって相手は美女だもの。その仕草、表情、オーラ。人一倍ナイーヴな私は、傷つく。帰り道、感情七号線に突っ込む。死ぬ。父は悔やみ、母は泣き、しかしマスメディアを通じて社会は笑う。ゲラゲラと。

二。私は前述した通りパジャマ姿であった。しかも寝癖、ときたら必然周囲から見て貧乏臭い映像に映っているであろうことは最早承知していた。それをいくら正当化しようと理論武装したところで結局は己が悪いという結論に至り、

弁論した語の数だけその時の敗北感・虚無感が募ることは目に見えている。私とて馬鹿ではない。故、いいのだ表面的評価は、そこは何もいわないでおこう、しかし。この店員は私を、「ケツを拭くことだけを考えながらここまで歩き、帰り道もケツを拭くことだけを楽しみに帰るんだな、可愛そうに、この先の人生もケツを拭くことだけを生き甲斐に生きてゆくんだわ、きっと」って、私の皮膚の内面の評価、即ち精神的領域にまで侵入し、遂には私の未来をも否定・同情し兼ねない。それは間違っている。確かに家を出た当初の目的はケツを拭く、それであった、あったとも、けれども。例えば道端で野草が咲いていたら、嗚呼、都会に遅く咲き誇っていて素敵だな、とか。八百屋の老婆が笑顔で接客をする様を見て、嗚呼、私も素敵な笑顔が似合う年寄りになりたい、だとか。色々思うことはあった訳で、何も来る最中ずっと「ケツフクゾケツ フクゾ」と念ずるように歩いていた訳ではないのであり、つまり見た目で品格それは仕方ないにせよ、未来までは否定しないで頂きたいのである、私は。

三。「というかこの人、実はもう糞をし終えた状態で、まだケツを拭いていないのでは」恐るべきそれである。私はまだ糞をしていない。

以上三点、他にも様々と考えられるが例として可能性が高そうなものから順に選びピックアップしてみた。どれも非常に恐ろしい。そこで賢者である私は一つの作戦を思いついた。他にも幾つかの今後必要になるであろう物品をまとめて購入し、トイレット・ペーパー単体の印象を、パンチを、意図的に和らげさせようという作戦である。

ほら、私は賢い。

トイレット・ペーパーを上回るインパクトを与えてるもの、ならばなるたけでかいものもいいな、と最初に選んだのは用途が全くわからない奇怪な陶器製の器。既に「今後必要になるであろう物品」とは程遠い存在ではあるが、まあよし。電池、ペン等は何だか勉強にいそしんでいそうな印象を与えられそうだな、いい、これも買っておこうか。そして、携帯灰皿。これはたまらない。一見ワイルドなスモーカーと見せかけて実はエコ的な意外性。肉食動物系の危うさと同時に草食動物的な優しさも兼ね備えた逸品である。将来、父となる男児には持ってこいの要素。もしかしたら今夜、君と肉体関係にまで発展するかも知れない。

結婚できるかも知れない。

人生が掛かったレジーの瞬間である。私は高鳴る鼓動を抑えつつ、それらをレジーの台へそっと乗せた。作戦は極めて順調である。流れるようにトイレット・ペーパーを見た程度で、上に挙げたような拒絶・同情・未来、否定系のオーラは一切出していない。合計で525円になります、と笑顔でいわれ、ジェノサイドなど余裕である。勝ちであるセックスである。私は財布を開いた。

ところが。

ざっと見てあるのは132円。悪夢である。ナイト・メアである。財布の小銭以外を収納する紙幣のエリアーに紙幣が入っていないことは先月からわかりきっている事実。しかし突発的に、ないことを知って尚確認する素振りをした。あっちゃ～下ろさなきゃないな～これは、今度はカード類を収納するエリアーを一応覗く。無論、下ろす金も口座にはないが口座にないことまではこのジェノサイド、知りえぬことなので、一応パカッと、するとなんてこったい。一番上にあったのは消費者金融・アコムで、あっ、見られた、アコムで、見られた、はじめてのアコム。作戦が、しかし私には更なる試練が待ち受けていた。

究極の選択。陶器の器、ペン、電池、携帯灰皿、そしてトイレット・ペーパーの中から、このジェノサイド店員の前で、一つ、選ばなくてはならないのである。答えはとっくにでているというのに。

おや？というか、私は何を悩む必要がある。もうアコムを見られてしまった以上、肉体関係は愚か、私たちは今後の人生、手も繋げない、友達にもなれないことは十中八九いえることであり、ここで数パーセントの希望に賭けて携帯灰皿を選ぶよりも便・ライフを明るく、楽しく、健やかにするために、無難にトイレット・ペーパーを選ぶ方が実用的且

絶対的利益となる訳であって、というか初心を取り戻して考えてみよう。ゴー・バック・トゥー・ベイシックである。

私は本格的に部屋から出ない生活をしようと思いを固めていた、しかしトイレット・ペーパーが切れてしまった。更に百円ショップの方がワン・ロール当たりの単価が安い、だからこうして遠路遙々下北沢までやってきている、つまり。全てはここでこの店員に「一生会わない戦法」を使えば予定通りの結末となるのである。ハッピー・エンドが待っているのである。それを人間ったら、欲が深いもんだから、つい。

私は「すまぬがトイレット・ペーパー以外は要らぬ」と、忍者のようにいった。この作戦がばれようが嫌われようが、影で、死ね忍者、と罵られようが、知らん。貴様とはもう一生会わないのだから、ふははは。もうこうなったらとヤケクソになった私は無敵である。それが証拠に今、にやにやと意味不明な笑みを浮かべている。ついでに鼻糞でもほじったるか、ぶりぶりぶり、ほうら屁もこいてやった。店員は完全に引いている。できれば惹かれたかったが、引いている。もう関係ない。私は私、貴様は貴様。一生もう会わない、他人なのである。

「105円になります」ひきつりながらも接客業を全うする店員。「ハイハイ、払いますよ」って、おい。財布の小銭のエリアーを再び開けて銀の側面がギザギザした硬貨を倒してみると、それはなんと50円玉で、あわせまして所持金 83円。己のケツを拭う紙すら買えぬのか、私は。

「子猫だちゃん、子猫だちゃん」

気が狂ったふりをしながらマイ・フェイバリット・失恋ソング「猫のレクイエム」を歌いつつ踊り、そのまま私はそくさと店を出て行った。何も買わずに。いさぎよくスマートに。

終い店の前で糞を排泄。通りを我物顔で横切る左右非対称の髪型をした気違い気取りの青年にその糞を素手で掴み上げ、投げつけながら号泣して走った。

それは初夏の、静かな午後の出来事であった。